

障害者子どもを産むべき

1

私には印象的で忘れることのできない映像がある。

それは、2018年に放送されたTBSの報道番組「報道特集」内で扱われた『旧優生保護法～北海道で何が』というテーマでまとめられた報道の一部である。

前半部は優生保護法についての解説であった。

報道映像に基づき、優生保護法などの概要を以下に示す。

1948年 **優生保護法**成立（1996年に廃止）

第一章 総則 第一条 この法律は、優生上の見地から不良な子孫の出生を防止するとともに…

・ 障害者は障害者の子どもを必ず生むという医学的に誤った考えや差別的な優生思想に基づき知的障害者らへの不妊手術が行われた

・ 優生保護法の下、強制不妊手術が行われた件数 **1万6475件**
(都道府県別最多は北海道 **2593件**)

1956年『優生手術(強制)千件突破を顧りみて』

- ・優生手術が千件を突破したことを記念して北海道で作られた冊子。そこには以下のような記述がみられる。

「優生保護法は民族衛生の見地からして誠に大きな意義を有する。」
「生来の怠け者」「野放しにされていること由々しき問題」

また、1972年の道議会内における道知事の答弁では

「不幸な子どもを生まない道民運動を展開、異常児出生の防止対策を行い、母子保健推進活動の強化を行っていく」

医師、行政、世間、、あらゆる人が優生保護法及び強制不妊手術に疑問を持たず、正しいこととして認識していたことが分かる

報道の後半部では、とある親子がインタビューに応じていた。

母 生まれつきの脳性まひ 両手が不自由 車いす生活
31歳で結婚 子どもを授かる
自身の母の手を借りながらシングルマザーとして子どもを育てる

ー母親に障害があることについて

ー長男（32） 「小学校のころは障害があるとか、車いすに乗っている母親はいなかったの
で恥ずかしいという気持ちもあったけど、母親だから仕方ないと思っていた」

ー母 「恥ずかしいかもしれないけど、行けば慣れる」

脳性まひをもち、車いす生活でありながらも出産、子育てを経験。

子どもを立派に育て上げることができた。

やはり優生保護法及び強制不妊手術は非合理的根拠に基づいたものであり、間違いであった？

「障害者こそ恋をして子どもを産むべき」

取材の中で母はこのように語った。また、以下のようにも話した。

「産んでよかった。障害者こそ子どもを産んで守ってもらわないと」

障害のある人でも恋愛、出産、子育てを経験する権利がある。
子どもを産むことができるにもかかわらず、強制的にその機会を奪うことは許されないことである。

一人で生きることには困難を抱えやすい障害者こそ
子どもを産んで世話をしてもらわなければならない

みなさんはそのように考えましたか？

少なくとも「障害者にも恋愛をして、子どもを産む自由がある」と
思ったのではないだろうか

しかし、その考え方は絶対的に全員が幸せになるものではない

続くインタビューでは息子は次のように答えた

「生まれてよかったと思えるようになりたい」

「生まれてよかったと強くは思わない。
いつかそう思えるようになりたい」

この取材に答えていた息子の心の内は複雑な感情であることが推察できる。

胸を張って「母のもとに生まれてきてよかった」とは言えない表情であった。

小学生の時は恥ずかしかったという話にもあるように、ずっと何か特別な感情を抱きながら成長してきたのだと予想できる。

障害者が恋愛をして、子どもを産むことはもちろん十分に守られるべき権利である一方、生まれる場所を選ぶことのできない子どもの目線で考えると、障害者のもとに生まれることの苦労や親のケアに伴う精神的・肉体的疲労も無視できないものであると感じた。

ヤングケアラーという問題があるように、学業期の子どもにとって介助の必要な人が家族にいることの影響は大きいと考える。自身が直接的に介助などに関わっていなくとも子どもには感じる場所があると思う。前述したように、周りの一般的な母親とのギャップから感じる恥ずかしさ、思春期には周囲の目線が気になるといったような当事者でなければわからない悩みが多々あると考えられる。

優生保護法が廃止され、障害者が子どもを産むことができるようになった現在、そのような家庭に生まれた子どもに対する支援を考えなければならないと感じた。福祉サービスなどによって家族の身体的負担を減らそうということはよく討論の議題となる。障害者の子どもを抱えた親の苦労などはこれまでも学んできたが、振り返ってみると障害者の親を抱えた子どもにフォーカスして学んだり考えたりすることは多くはなかったと思った。

実際の声として「生まれてよかったとは思えない」という声がある。障害者の親をもつ子どもの心に寄り添い、そのような子たちの悩みに応え、サポートしていく方法についても検討していく必要があるのではないかと考えた。